



一〇一〇

前橋市教育委員会

前橋城(南曲輪地点No.2)

前橋城(南曲輪地点No.2)

— 都市計画道路前橋公園通線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2010.12
前橋市教育委員会

前橋城（南曲輪地点 No.2）

— 都市計画道路前橋公園通線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2010.12
前橋市教育委員会

は じ め に

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、赤城山と榛名山の裾野をぬって南北に利根川が流れる、四季折々の風情に溢れる県都です。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋八幡山古墳や前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・総社二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王庵寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中核をなす施設が次々に造られました。中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られています。

今回、報告書を上梓する前橋城は、かつて徳川家康より「関東の華」といわれました。その築城は古く、15世紀末に長野氏によるとされています。この城は江戸を守る北関東の押さえとして、宇都宮、川越、忍と並び、関東四名城の一つに数えられたといわれます。

今回の調査では、再築前橋城二の丸の外堀跡が検出されました。また、調査区から多数の埴輪片が出土し、近隣に古墳が存在していたことをうかがわせ、古墳時代から近世までの歴史の移り変わりを辿れる結果となりました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、本発掘調査事業の実施にあたり、ご理解とご協力を賜りましたロイヤルホテルをはじめ地元関係者の方々に感謝申し上げます。本報告書が本市の歴史研究や普及活動に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 22 年 12 月

前橋市教育委員会

教育長 佐 藤 博 之

例　　言

1. 本報告書は都市計画道路前橋公園通線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から本書刊行に至るまでの経費は、前橋市の負担によって行った。
3. 発掘調査及び整理作業は前橋市教育委員会の指導のもと、有限会社歴史考房まほらが実施した。
4. 発掘調査の要項は以下の通りである。
 - ・遺跡名稱 前橋城（南曲輪地点 No.2）遺跡コード：22H49
 - ・調査主体 前橋市教育委員会
 - ・遺跡所在地 前橋市大手町一丁目 123-5 番地ほか
 - ・調査担当者 神宮聰（前橋市教育委員会）、山崎芳春（有限会社歴史考房まほら）
 - ・発掘調査期間 平成 22 年 7 月 6 日～8 月 6 日
 - ・調査面積 約 235m²
 - ・整理期間 平成 22 年 8 月 7 日～12 月 20 日
5. 発掘調査・整理作業に伴い、各作業を以下の通り委託した。
 - ・基準点測量作業、遺構平面図の作成は田中隆明に委託した。
 - ・デジタル編集作業は村田優子、遺物写真撮影作業は山際哲章に委託した。
6. 本書の編集作業は山崎芳春が行った。執筆はが神宮聰、その他を山崎芳春が担当した。
7. 本調査で収集した資料及び出土遺物は一括して前橋市教育委員会が保管・管理している。
8. 発掘調査及び整理作業に従事された作業員は以下の通りである。（敬称略、50 音順）
発掘調査 狩野友好・斎藤清一・角田三喜夫・森山孝男・渡辺義雄
整理作業 沼尾真二・村田優子
9. 本書作成にあたり多くの方々のご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表するものである。（敬称略、50 音順）
倉石広太・鈴木澄江・丹野祥枝・山下工業株式会社・有限会社毛野考古学研究所

凡　　例

1. 本書に使用した地図は、国土地理院発行 1/25,000 地形図、国土地理院発行 1/5,000 前橋市現形図（1/2,500 を 50% に縮小）を使用した。
2. 遺構平面図の北方向は座標北方向を、水準線は標高を示す。座標は国家座標第 IX 系を使用した。
3. 調査区のグリッド設定は、群馬県教育委員会刊行の『前橋城遺跡 I』『前橋城遺跡 II』の設定に従い、5m 方眼を探用し、「前橋城遺跡 II」の「付図 1 前橋城遺跡 1 次～7 次発掘調査区とグリッド配置」にあわせ、国家座標第 IX 系 X=43100m・Y=68880m を基点（A=0）とする。グリッド名は、アルファベットと数字で表記した。
4. 本書に掲載した各遺構図、遺物実測図、遺物写真的縮尺は各図下に記載した。
5. 土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版標準土式色帖』を使用した。
6. 本報告書の本文、土層注記で使用した火山噴出物は、浅間板鼻黄色輕石：As - YP、約 1.3 ~ 1.4 万年前^{#1} 降下。
7. 遺構種別の略号は、土坑=D、堀・溝=Wとした。
8. 遺物番号は、図面・写真図版、観察表とともに統一している。遺構平面図中の（ ）付きの番号は取上時の遺物番号である。
9. 実測土器の中で口縁部の残存率が 1/2 未満の為、復元実測をしたもののは、土器内面の口縁部縫を中軸線から離して実測図を作成している。
10. 遺物実測図で使用したトーンは次の通りである。■は施釉範囲、■は受熱・煤の範囲に使用した。
11. 遺物観察表の計測値の <　> は残存値を表す。
12. 遺物観察表の胎土の略号は q= 石英、a= 角閃石、c= 結晶片岩、r= 赤色粒子、w= 白色粒子を表す。

註

#1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代

目 次

はじめに

例言・凡例

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 調査の方針と経過	4
IV 基本層序	4
V 検出された遺構と遺物	5
VI まとめ	14

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡図	2	第8図 2号塙遺構図	8
第2図 遺跡位置図	3	第9図 1号溝・1号土坑遺構図	9
第3図 基本層序	4	第10図 出土遺物実測図（1）	10
第4図 D-I 遺物出土状況	5	第11図 出土遺物実測図（2）	11
第5図 D-I 遺構底面	5	第12図 出土遺物実測図（3）	12
第6図 遺跡全体図	6	第13図 円筒埴輪	15
第7図 1号塙遺構図	7	第14図 前塙城絵図と本調査区検出遺構の対応関係	15

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	2・3	第2表 遺物観察表	12・13
-------------	-----	-----------	-------

写真図版目次

PL.1 調査区1 全景 北から / 調査区1 W-1 SPA 南東から	
PL.2 調査区2 全景 南から / 調査区2 W-2 SPB 南から	
PL.3 調査区3北側 全景 南東から / 調査区3北側 W-3 完掘状況 全景 南東から	
PL.4 調査区3北側 W-3 SPA 南東から / 調査区3北側 W-3 SPA 東から / 調査区3北側 W-3 遺物出土状況 近接 南東から	
調査区3北側 W-3 完掘状況 全景 南東から / 調査区3南側 全景 南から	
PL.5 調査区3南側 全景 東から / 調査区3南側 D-I 遺物出土状況 全景 南東から / 調査区3南側 D-I 遺物出土状況 全景 北から	
調査区3南側 D-I 深・遺物出土状況 西から / 調査区3南側 D-I 完掘状況 全景 南東から	
PL.6 調査区3南側 D-1 SPA 南から / 調査区3南側 D-1 押張状況 西から / 調査区3南側 D-1 遺物出土状況 南東から	
調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接1 南東から / 調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接2 南東から	
調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接3 南東から / 調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接4 南東から	
調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接5 南東から	
PL.7 出土遺物（1）	
PL.8 出土遺物（2）	
PL.9 出土遺物（3）	

I 調査に至る経緯

平成22年1月27日付で前橋市長 高木政夫（道路建設課）より都市計画道路前橋公園通線道路改良工事に伴い埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地（前橋城）に属するため、3月9～12日に試掘調査を実施した。その結果、前橋城の堀跡等のほか円筒埴輪片等が検出されたため、前橋市と記録保存を目的とした発掘調査について調整に入り、5月31日付で前橋市長 高木政夫（道路建設課）より埋蔵文化財の発掘調査依頼が教育委員会に提出された。これを受けた教育委員会では直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織を導入して発掘調査を実施することとした。現地調査は、教育委員会指導のもと、6月22日付で前橋市と埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した有限会社歴史考房まほら（代表取締役 笠原仁史）が担当した。

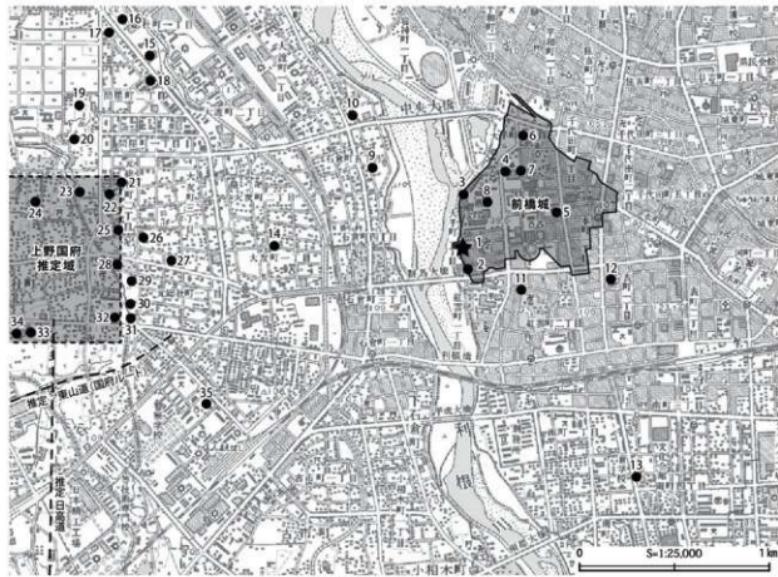
II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

本遺跡は、標高約107mで、前橋台地の北東端に位置する（第1・2図）。前橋台地は広瀬川低地帯と井野川に挟まれた地域で、北方は棟名山から延びる扇状地、南方は高崎台地と接する。台地の中央を南流する現利根川は15世紀後半では前橋市街地の北東に帶状に延びる旧利根川流路を流れていたが、度重なる洪水等による影響で17世紀頃にはほぼ現在の流路に移動し、台地の環境はこの間、激的に変化した。本遺跡地と利根川との比高差は断崖によって約15mあり、川による浸食の激しさを想像できる。前橋台地の堆積は、洪積世時代に利根川によってもたらされた扇状地堆積物とされている前橋砂礫層が基盤層である。その後、浅間山の山体崩落に起因する前橋泥流堆積物（21,000年前に堆積）や前橋泥炭層（13,000年前に堆積）が堆積し、さらに棟名山を起源とする绳文時代早期頃に堆積した總社砂層等により形成されており、扇状地と後背湿地が入り組んだ地形をなしている。現在、遺跡地周辺の土地利用は、官庁や住宅地として利用されており、北約150mには群馬県庁が、西隣には群馬ロイヤルホテルが在る。

2. 歴史的環境

本遺跡の周辺（第1図、第1表）では旧石器時代は確認されていない。縄文時代は僅かに確認され、前橋遺跡II（8）で前期後半の土器が出土している。弥生時代は河川や谷地沿いで極僅か確認されている程度である。古墳時代は遺跡数が急増し、集落と生産遺構が数多く確認されるようになり、大友屋敷II・III遺跡（28）では集落が、元総社明神遺跡I～III（29）では同一遺跡から集落と水田が確認される。古墳が各地で造営され6世紀初頭では前方後円墳の王山古墳（10）や、前橋城北曲輪遺跡（6）で円墳が確認されている。奈良・平安時代はさらに集落や生産域が拡大する。前橋城（5）では平安時代の住居が4軒、前橋城遺跡II（8）では住居・井戸・土坑等が確認でき、24号土坑からは灰釉陶器三足环段皿が出土している。天神III遺跡（33）では、住居・掘立柱建物・土坑等が確認され、2号土坑から8稜鏡が、住居から香炉・大型円面鏡が出土し、官衙的色彩が強い。大友宅地派遺跡（14）で水田が確認されている。その他、元総社宅地遺跡I～23トレンチ（24）では住居・鍛冶場遺構・道路状遺構が確認されている。中世・近世以降は、本遺跡周辺地域は、室町時代に上野国守護代の長尾氏が築いた首海城（上野国府跡）の支配下であったが、長尾氏の衰退とともに勢力を伸ばしてきた箕輪城の長野氏に築城された鷹橋城の支配下に移る。利根川対岸には武田信玄が鷹橋城攻城のために築城した石倉城（9）がある。近世になると、鷹橋城は、酒井忠世によって、城の整備が行われ近世城郭へと生まれ変わり、酒井忠清の時代に前橋城に改称される。前橋城遺跡II（8）では、近世前橋城の堀・石垣・城門・橋と、再築前橋城の御殿玄関が確認され、筆頭家老「高須隼人」の侍屋敷の井戸から宛名・差出人が書かれた墨書き簡が2点出土している。前橋城（南曲輪地点）（2）では、再築前橋城の堀が確認される。また、前橋城（南曲輪地点）（2）、前橋城北曲輪遺跡（6）や前橋城三の丸遺跡（7）では城内の侍屋敷が確認されており、居住者が判明している。



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡図 S=1/25,000

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	検出された遺構と遺物	報告書及び文献
1	前橋城(南曲輪地点No.2)	本居	本居所收(題跡)
2	前橋城(南曲輪地点)	奈良・平安:住居・土坑・井戸・ビット。近世:堀・土坑・建物・ビット・溝・井戸・礎石	2009「前橋城(南曲輪地点)」 前橋市埋蔵文化財発掘調査班
3	前橋城遺跡	近世:堀	2004「前橋城遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査班
4	前橋城三ノ丸遺跡	近世:自然流路、穴・溝・井戸・埋構・建物跡・ビット列・ビット	1998「前橋城三ノ丸遺跡」 前橋地方・家庭裁判所遺跡調査会
5	前橋城(車橋門丸馬道橋の調査)	平安:住居・土坑、近世:堀・井戸・溝、現代:井戸・堅穴状構築・埋設木樋。時期不明:土坑・ビット	2008「前橋城(車橋門丸馬道橋の調査)」 前橋市教育委員会
6	前橋城北曲輪道路	古墳:円墳。中・近世:掘立柱建物・ビット・土坑・井戸・溝・池	2002「前橋城北曲輪道路」 前橋市埋蔵文化財調査事業団
7	前橋城三の丸道路	古代:溝。中世:井戸・水田。近世:礎石建物・溝・井戸・土坑・ビット・堅穴置構・石列	2007「前橋城三の丸道路」 前橋市埋蔵文化財調査事業団
8	前橋城遺跡Ⅰ・Ⅱ	縄文:包含層、平安:住居・井戸・土坑・溝。中世:堀・溝・井戸・堅坑、近世:堀・石垣・城門・橋・井戸・土坑・溝・庭園・水田・瓦混まり。近代:井戸・土坑・溝・埋構・建物	1997「前橋城遺跡Ⅰ」群馬県教育委員会 1999「前橋城遺跡Ⅱ」群馬県教育委員会
9	石倉城跡	中世:利根川の河床変更で崩壊	
10	王山古墳	6世紀初頭築造の前方後円墳	
11	龍海院埋古墳	削平・現存せず	
12	前橋市第9号墳	飛鳥時代	
13	南町市之坪遺跡	古墳:平安:住居・掘立・土坑・ビット・バレース系窓	2008「南町市之坪遺跡」前橋市教育委員会
14	大友宅地添道路	平安:水田	1998「大友宅地添道路」 前橋市埋蔵文化財発掘調査班
15	稲荷塚東道路	古墳:住居・奈良・平安:住居・溝・カマド構築材探査窓・井戸	2003「稲荷塚東道路」 前橋市埋蔵文化財調査事業団
16	産業道路東道路	縄文:住居	1966「産業道路東道路」前橋市教育委員会
17	産業道路西道路	縄文:住居	?「産業道路西道路」前橋市教育委員会
18	稲荷山古墳	6世紀後半築造の円墳	

19	總社甲稻荷塲大道西遺跡・Ⅱ遺跡	古墳：住居、奈良・平安：住居、講、中世：島、近世：講	2001「總社甲稻荷塲大道西遺跡・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
20	總社甲稻荷塲大道西遺跡・Ⅳ遺跡、社界開明神北遺跡	構文：住居、古墳：住居、塼、奈良・平安：住居、島、講、中世：島	2002・2003「總社甲稻荷塲大道西遺跡・Ⅳ遺跡、社界開明神北遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
21	開闢南遺跡	奈良・平安：講	1983「開闢南遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
22	開闢南遺跡	古墳：住居、奈良・平安：講	1985「開闢南遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
23	總社開明神北遺跡・Ⅱ遺跡・V遺跡、元総社西遺跡群（7・9・10）	古墳：住居・水田・島・溝、奈良・平安：住居・講・掘立、中世：講	1999-2001・2004・2006「總社開明神北遺跡・Ⅱ遺跡・V遺跡、元総社西遺跡群（7・9・10）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
24	元総社宅地遺跡1～23トレanche	古墳：住居、奈良・平安：住居・掘立・圓治場・溝、道路状遺構、中世：溝、近世：住居・古輪塔	2000「元総社宅地遺跡1～23トレanche」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
25	屋敷遺跡・Ⅱ遺跡	古墳・奈良・平安：住居、中世：塼・石敷遺構	1986・1995「屋敷遺跡・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
26	暁越II遺跡	平安：住居	1988「暁越II遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
27	暁越遺跡	奈良・平安：住居・溝	1987「暁越遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
28	大友屋敷II遺跡・Ⅲ遺跡	古墳：住居、平安：住居・溝、地下式土坑	1987「大友屋敷II遺跡・Ⅲ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
29	元総社明神遺跡I～難	古墳：住居・塼・水田、奈良・平安：住居・溝、大型人形、中世：住居・講・日天茶碗	1982～1996「元総社明神遺跡I～難」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
30	元総社寺田遺跡I～Ⅲ	古墳：水田・溝、奈良・平安：住居・溝、中世：溝	1988～1991「元総社寺田遺跡I～Ⅲ」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
31	寺田遺跡	平安：溝・木製器	1986「寺田遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
32	元総社小学校庭遺跡	平安：掘立・柱穴群・周濠	1962「元総社小学校庭遺跡」前橋市教育委員会
33	天神III遺跡	奈良・平安：住居・掘立・土坑・溝状・ピット・八棱鏡・鍛冶陶器・大型円錐面・香炉、中世：溝状（廻）・道路状遺構	2008「天神III遺跡」前橋市教育委員会
34	天神遺跡・Ⅱ遺跡	奈良・平安：住居	1986・1988「天神遺跡・Ⅱ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
35	元総社稻葉遺跡	縄文：土坑、平安：住居・瓦塔	1993「元総社稻葉遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団



第2図 遺跡位置図 S=1/5,000

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

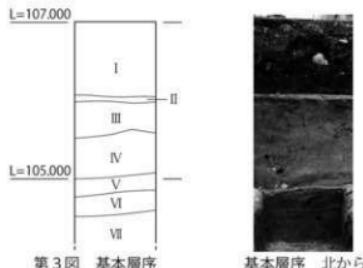
前橋市教育委員会が行った試掘調査の結果、前橋城外堀・古墳周溝等の遺構が想定された。発掘調査の開始にあたり、アスファルト舗装の除去を行い、残土置場や自動車の進入路を確保するため調査区を3つに分割し北側から表土除去作業を行った。残土は周辺住民に配慮し、防護した。調査区の座標は、国家座標第IX系を使用した。遺構の調査だが、調査区1の堀は前橋城二の丸の外堀と想定され、調査期間と土量から重機で遺構確認・掘り下げ作業を行った。調査区2～3は調査期間の制限から重機で遺構を確認し、精査をジョレン等で行った。遺構の掘り下げは移植ゴテを基本とし、適時必要に応じて鋼鋸・スコップを使用した。調査は、ベルトを設定し遺構毎に土層の観察を行なながら掘り下げ作業を行った。遺構平面図は、器械測量で行い、底面や下層から出土した遺物は、器械測量で位置を計測しNo.を付けて取り上げ、覆土中の遺物は遺構毎に一括で取り上げた。調査記録の写真撮影は35mmカラーリバーサルフィルム、同モノクロフィルム、デジタルカメラの3種類を使用した。

2. 調査の経過（平成22年7月6日～平成22年8月6日）

- 7月 6日 調査着手、機材搬入、調査区のアスファルト舗装除去、重機による表土掘削。
7月 7日 調査区1調査開始。堀(W-1)の確認・調査、前橋市教育委員会との作業工程確認。
7月 9日 調査区1測量、前橋市教育委員会の検査、調査完了。
7月 12日 調査区2調査開始。重機による表土掘削。堀(W-2)確認、完掘。調査区1の埋め戻し。
7月 14日 調査区2測量、前橋市教育委員会の検査、調査完了。
7月 15日 調査区3南側調査開始。重機による表土掘削。土坑(D-1)確認・調査。調査区2埋め戻し完了。
7月 22日 調査区3南側測量、前橋市教育委員会の検査、調査完了。
7月 23日 調査区3北側調査開始。調査区3南側のアスファルト舗装除去、重機による表土掘削、土坑(D-1)の範囲、溝(W-3)を確認・調査。調査区3南側埋め戻し完了。
7月 29日 遺構完掘。調査区3北側測量、前橋市教育委員会の検査、調査完了。発掘器材・資材等撤収。
8月 6日 調査区1・3北側埋め戻し完了。前橋市教育委員会の埋め戻し検査完了。発掘完了。

IV 基本層序

基本層序は調査区1で設定した。I～VI層に分層できる（第3図）。I層は現代の土壤で調査区の全域に堆積する。II層は白色軽石を含む黄褐色シルトの水成堆積層であることから総社砂層と思われる。本層上面が遺構確認面となり、調査区の南側ほど削平が少ないようで層が厚くなる。本調査の南に隣接した発掘調査報告書（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2009）の基本層序のIV層に相当する。III層は水成堆積ローム層である。IV層は色調が異なるがIII層と同様の堆積である。V・VI層は、火山灰の分析を行っていないが、As-YPと思われる。V層が火山灰の堆積層、VI層が軽石の堆積層と思われる。VII層は灰褐色シルトの水成堆積である。



No.	注記	色調	土質 粘性	しまり	備考
I	黒	有	有	コングリート等混入	
II	黄褐色	強	強	シルト層。水成堆積層、遺構確認面	
III	黄褐色	無	有	ローム層。水成堆積層	
IV	黄褐色	強	無	ローム層。水成堆積層、ブロック状に剥離入	
V	赤褐色	無	強	一次堆積のAs-YP成層大山灰層	
VI	黄褐色	無	無	一次堆積のAs-YP軽石層	
VII	褐灰色	強	有	シルト層。水成堆積層	

V 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、堀 2 条、溝 1 条、土坑 1 基である（第 6 図）。帰属時期は出土遺物や周辺遺跡の状況から、堀 1 条（W-1）は近世・近代以降に属し、堀 1 条（W-2）と溝 1 条（W-3）と土坑 1 基は不明である。遺構の遺存状況は、調査区全域にわたり後世の削平や掘削の影響であまり良くなく、全ての遺構の上端は削平され、当時の状況を示していないと推測される。遺物の内容については観察表にまとめた（第 2 表）。

1. 堀（W-1・2）

堀は 2 条確認した。1 号堀（W-1）は東西方向に延びる堀である（第 7 図）。『再築前橋城絵図』や周辺の前橋城関連遺跡の調査結果から前橋城二の丸の外堀と認定できる。本調査区画では、南北の壁面の立ち上がりの確認を目指した。その結果、本調査で、南側の立ち上がりを確認できた。北側の立ち上がりだが、W-1 は調査区外に延び、確認できなかった。調査は調査区周辺の安全を考慮して、地表面下約 2.5m まで掘り下げた。本調査では、W-1 が東西方向に延びていること、南側の立ち上がりと幅 15m 以上あることを確認した。覆土中にはコンクリート片、レンガ片などの廃棄物がまじり、現代の開発の影響が伺えた。2 号堀（W-2）は、東西方向に延びる堀である（第 8 図）。南側の立ち上がりを確認したが、北側は調査区外の道路に延びるため立ち上がりを確認できなかった。幅は 3.5m 以上、深さは 2.3m ある。遺物は覆土からは検出されなかった。この堀の時期は不明である。『再築前橋城絵図』で確認できず、絵図では道となっている。このことからそれ以前に埋められたか、前橋城廃城後に W-2 が作られ、その後埋められたと考えられる。

2. 溝（W-3）

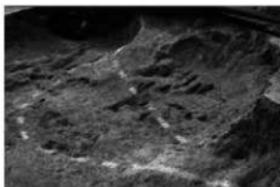
1 号溝（W-3）は、東西方向に延びる溝である（第 9 図）。西は調査区外に延び、東は攪乱によって不明である。溝は幅 1.7m、深さ 1.2m、断面形状は薺研形である。出土遺物は円筒埴輪片、形象埴輪片、陶器である。この堀の時期だが、『再築前橋城絵図』で確認できないことからそれ以前に埋められたと考えられる。使用された時期は、薺研形という溝の形態から中世と推測するくらいで明確な時期は不明である。

3. 土坑（D-1）

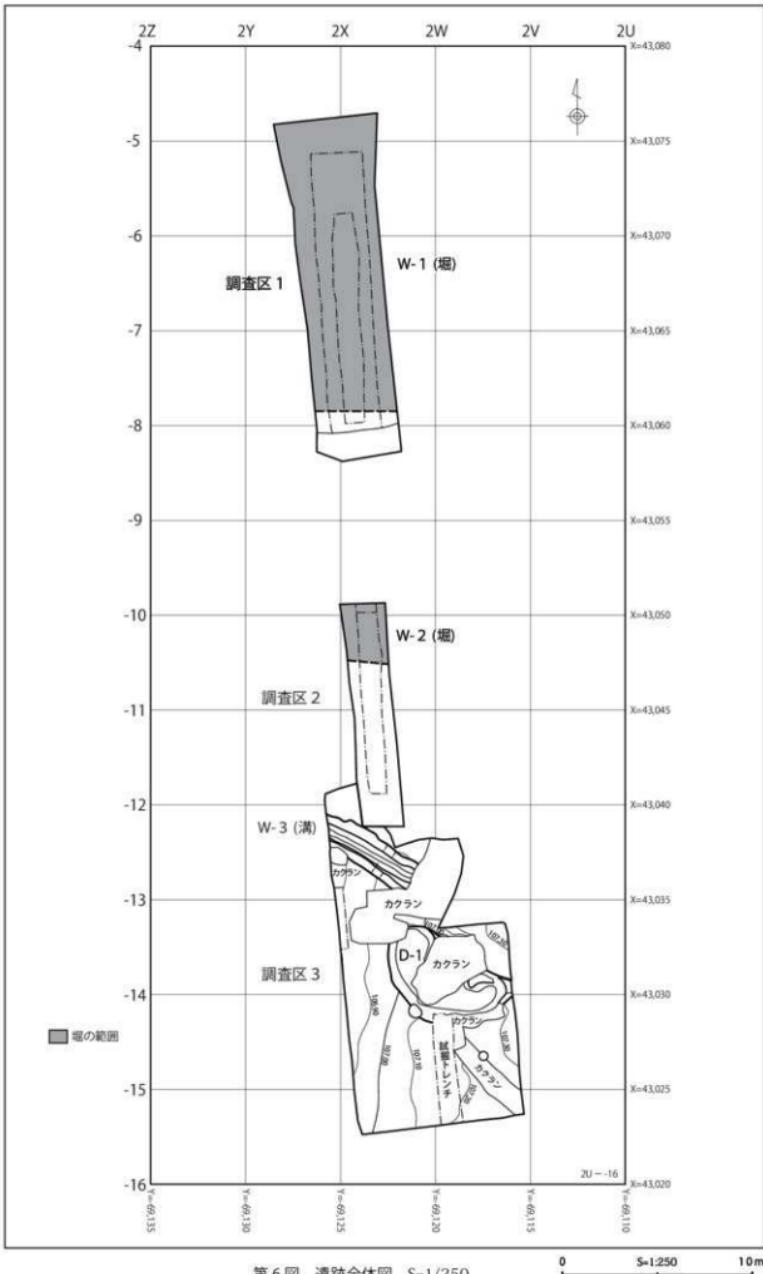
土坑は 1 基確認した（第 9 図）。本遺構は、試掘トレンドでの確認時に出土遺物の主体が円筒埴輪片であったことから古墳の周溝と想定された。本調査においては試掘時の想定に従って周溝と考へて慎重に調査を進めた。その過程で、円筒埴輪片や古墳の葺石と想定できるような玉石が多数出土し、石は南側から流れ込んだような出土状況であった（第 4 図）。調査は、広範囲の攪乱によって遺構平面の確認が困難であったため、遺構壁面を追って形状を確認する方法をとった。その結果、周溝ではなく、いびつな梢円形になると、遺構底面からは重機のバケットの爪のような痕跡（第 5 図）が確認され、遺構の大部分が攪乱を受けている可能性が高いことがわかった。攪乱部分の土と遺構覆土については、差がほとんどみられず、遺構掘り下押し時に見分けられなかった。以上の経過から本遺構は土坑とした。1 号土坑（D-1）は長径 7.2m、短径 4.2m の梢円形状で、深さ 0.8m である。出土遺物は、円筒埴輪片、朝顔形埴輪片、須恵器片、土師器片、陶器片である。埴輪はその形態から 5 世紀後半と推測され、土坑の時期は不明である。円筒埴輪・朝顔形埴輪や古墳の葺石のような玉石が存在することから本遺跡の周辺に古墳が存在した可能性がある。

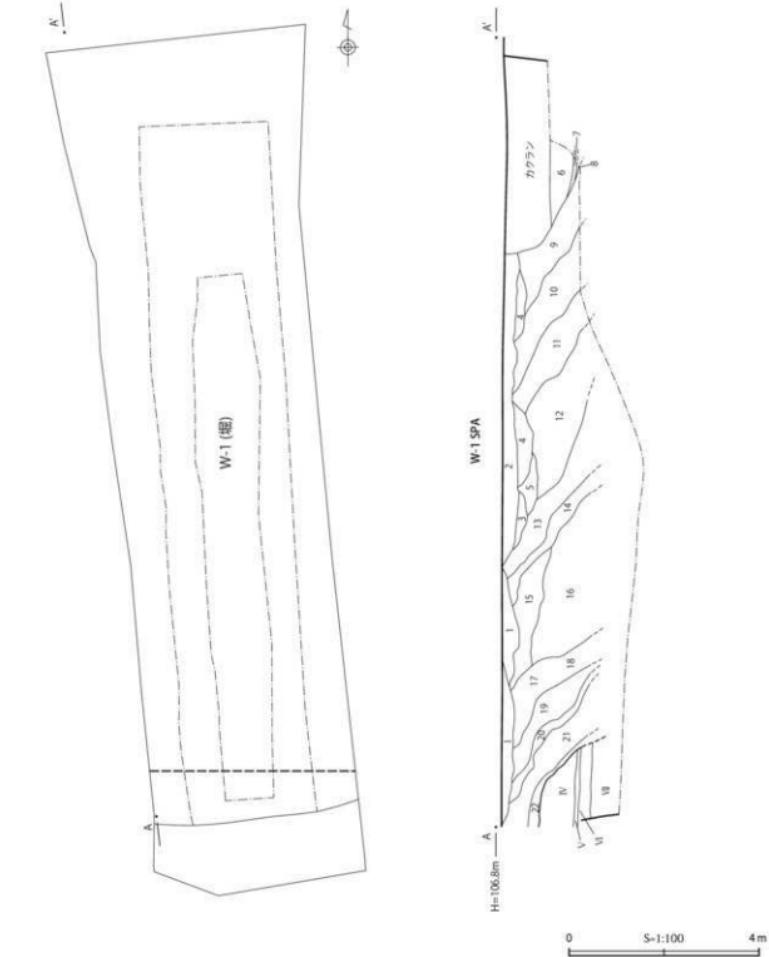


第 4 図 D-1 遺物出土状況



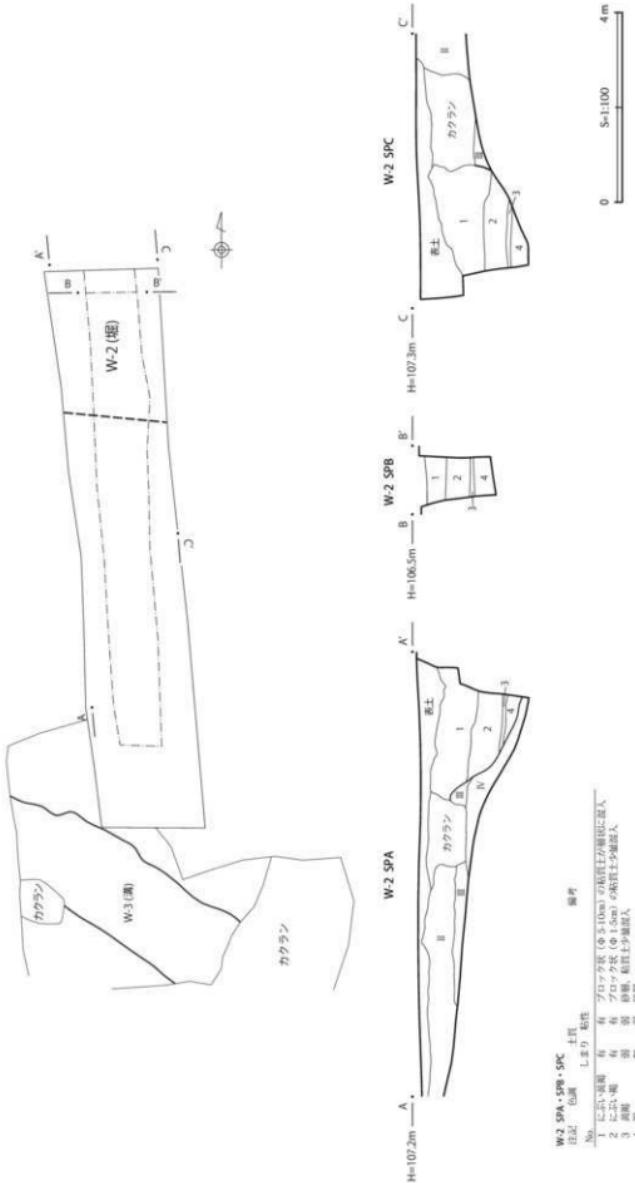
第 5 図 D-1 遺構底面



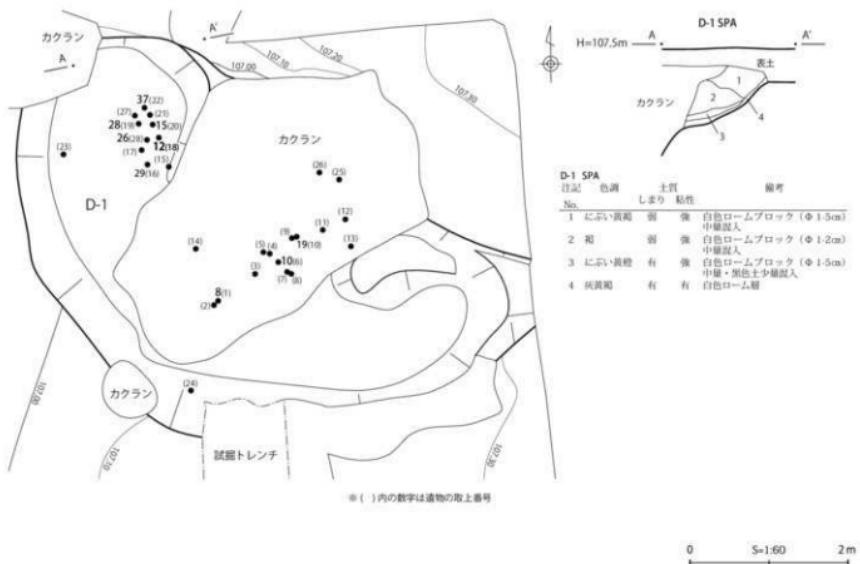
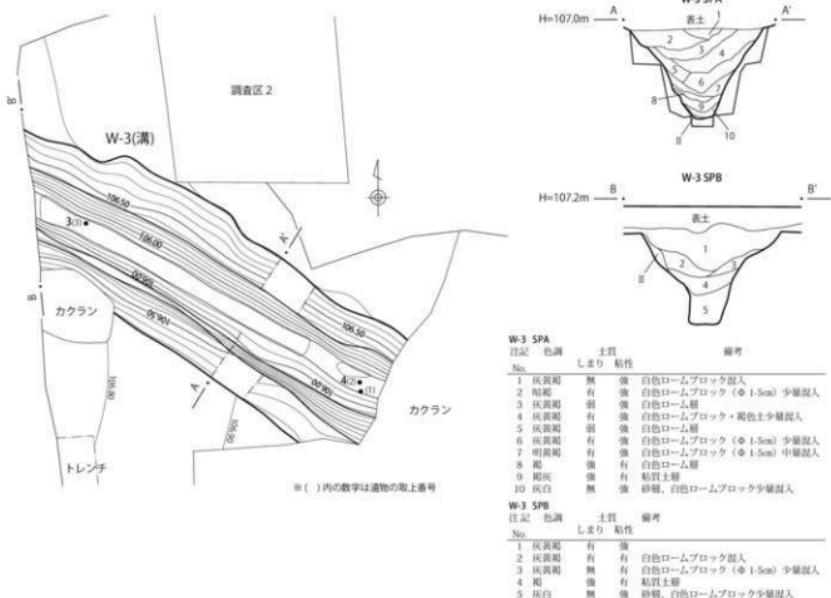


No.	色調	土質 粘性	しまり	参考	No.	色調	土質 粘性	しまり	参考
1	黒	強	弱	深 (0.1-1.0m)・成化物混入。	12	灰黄褐	強	弱	粘質土・成化物少無混入。
2	明黄褐	強	弱	薄 (0.1-1.0m)・ブロック状の土混入。	13	灰黄褐	強	弱	粘質土・成化物少無混入。
3	黒	強	弱	薄 (0.1-0.5m)・ブロック状の土混入。	14	黒	強	弱	薄 (0.1-0.5m)・中量・成化物少無混入。
4	明黄褐	強	弱～有	薄 (0.1-1.0m)・ブロック状の土混入。	15	明黄褐	有～無	弱～強	砂質土・白色軽石・ブロック状の粘質土混入。
5	灰褐	強	弱	薄 (0.1-1.0m)・ブロック状の土混入。	16	灰黄褐	有～無	弱	砂質土 (0.05m)・ブロック状の粘質土混入。
6	灰褐	強	弱～弱	水成岩結構の粘質土。	17	黒	有	有	粘質土。
7	明黄褐	無	無	軽石 (0.05-1m) 混入。	18	灰黄	有～無	有	軽石 (0.05m)・ブロック状の粘質土・帶状粘質土混入。
8	黒	強	強	粘質土。	19	灰黄	有～無	弱	軽石 (0.05m)・ブロック状の粘質土混入。
9	明黄褐	有～無	無～強	砂質土・白色軽石・ブロック状の粘質土混入。	20	黒	有	有	粘質土。
10	灰黄褐	有～無	弱	軽石 (Φ 0.5cm)・ブロック状の粘質土混入。	21	灰黄褐	有～無	弱	軽石 (Φ 0.5cm)・ブロック状の粘質土混入。
11	黒	強	弱	薄 (0.1-0.5m) 中量・成化物少無混入。	22	暗褐	有	有	白色軽石・成化物混入。

第7図 1号堀遺構図 S=1/100

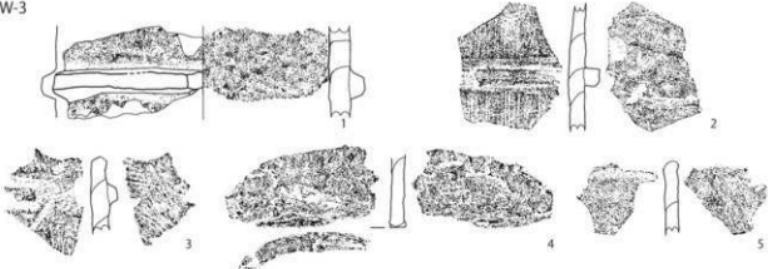


第8図 2号堀遺構図 S=1/100

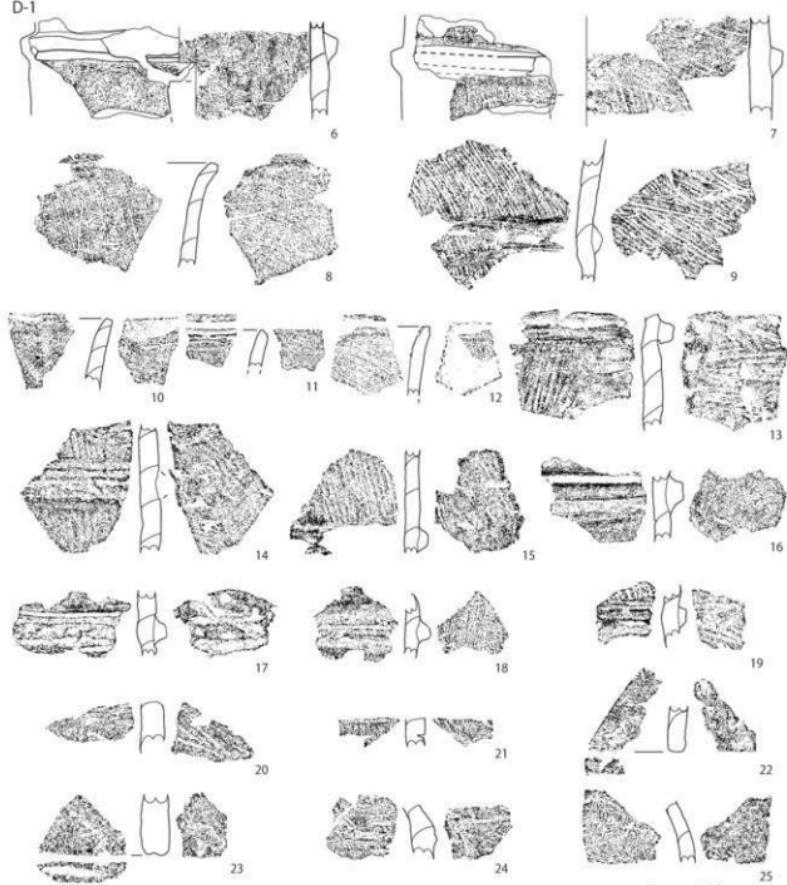


第9図 1号溝・1号土坑遺構図 S=1/60

W-3



D-1



第10図 出土遺物実測図（1）

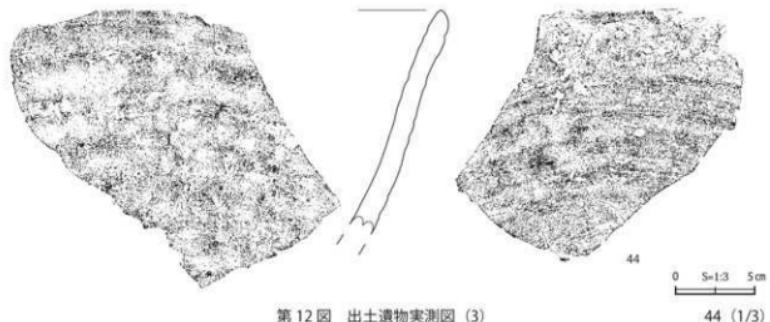
0 S-1:4 10cm

1 ~ 25 (1/4)



第11図 出土遺物実測図（2）

遺構外



第12図 出土遺物実測図(3)

44 (1/3)

第2表 遺物観察表

擇因 写真 番号	器種	出土 位置	包含 位置	計測値(cm)		調整		色調	焼成	胎土	残存状態	備考	
				口	深	底	径	器	高	外	面	内	面
1	円筒埴輪	W-3	覆土				<7.9>	斜切	縱切	柾	良	q/a/r/w	体部
2	円筒埴輪	W-3	覆土				<11.4>	縱切	横切	柾	良	q/a/r/w	体部
3	円筒埴輪	W-3	覆土				<6.5>	縱切	斜切	にぶい柾	良	q/a/r/w	体部
4	円筒埴輪	W-3	覆土				<6.7>	縱切	横切	赤褐	良	q/a/r/w	基部
5	形象埴輪	W-3	覆土				<6.3>	斜切	斜切	にぶい柾	良	q/a/c/r/w	-
6	円筒埴輪	D-1	試掘ト レンチ				<8.5>	縱切	縱・横切	柾	良	q/a/r/w	体部
7	円筒埴輪	D-1	擾乱				<9.3>	縱切	縱切	柾	良	q/a/r/w	体部
8	円筒埴輪	D-1	覆土				<10.1>	縱切	横切	柾	良	q/a/r/w	口縁部
9	円筒埴輪	D-1	覆土				<12.1>	斜切	横切	柾	良	q/a/r/w	口縁部
10	円筒埴輪	D-1	覆土				<6.5>	縱切	斜切	にぶい柾	良	q/a/r/w	口縁部
11	円筒埴輪	D-1	覆土				<3.6>	横切	横切	柾	良	q/a/r/w	口縁部
12	円筒埴輪	D-1	覆土				<5.8>	縱切	横切	柾	良	q/a/r/w	口縁部
13	円筒埴輪	D-1	擾乱				<10.1>	縱・横切	横切	柾	良	q/a/r/w	体部
14	円筒埴輪	D-1	覆土				<11.0>	縱切	斜切	にぶい柾	良	q/a/r/w	体部
15	円筒埴輪	D-1	擾乱				<9.1>	縱切	斜切	柾	良	q/a/c/r/w	体部
16	円筒埴輪	D-1	擾乱				<7.9>	縱・横切	縱切	柾	良	q/a/r/w	体部
17	円筒埴輪	D-1	覆土				<5.8>	横切	横切	柾	良	q/a/r/w	体部
18	円筒埴輪	D-1	試掘ト レンチ				<5.9>	横切	斜切	柾	良	q/a/r/w	体部
19	円筒埴輪	D-1	覆土				<6.3>	縱切	斜切	にぶい柾	良	q/a/r/w	体部

擇因 写真 番号	器種	出土 位置	包含 位置	計測値(cm)		調整		色調	焼成	胎土	残存状態	備考	
				口徑	底径	器高	外面						
20	円筒埴輪	D-1	覆土			<4.6>	横切	横・斜ナギ	柾	良	q/a/r/w	体部	赤彩
21	円筒埴輪	D-1	覆土			<2.3>	縦切	斜ナギ	柾	良	q/a/r/w	体部	透かし
22	円筒埴輪	D-1	覆土			<6.2>	横切	横切	に赤い柾	良	q/a/r/w	基部	
23	円筒埴輪	D-1	攢乱			<5.6>	—	縦ナギ	に赤い柾	良	q/a/r/w	基部	
24	朝顔形埴輪	D-1	覆土			<4.7>	縦切	縦・横ナギ	柾	良	q/a/r/w	肩部	
25	朝顔形埴輪	D-1	攢乱			<5.1>	斜ナギ	斜ナギ	柾	良	q/a/r/w	肩部	
擇因 写真 番号	種別	器種	出土 位置	包含 位置	計測値(cm)		調整・文様等 (外=外側、内=内側)		色調	焼成	胎土	残存状態	備考
					口 長	底 幅	器 高	厚					
26	瓦質陶器	甕?	W-1	攢乱			<5.9>	外:平行印き	灰白	良	q/a/w	肩部	
27	陶器	瓶?	W-3	覆土		<7.8>	<2.8>	付高台	に赤い赤褐	良	q/w	底部	
28	土器	甕	D-1	覆土	<13.8>		<8.4>	外:口縁ヨコナデ。内: 部ハラケツリ 内:脇部ハラナデ	に赤い赤褐	良	q/a/r/w	口縁~肩部	
29	土器	甕	D-1	覆土			<3.4>	マツツ	明赤褐	良	q/a/r/w	肩部	
30	須恵器	甕	D-1	覆土			<5.6>	外:平行印き 内:青釉波紋状あて具	灰	良	q/a/w	肩部	
31	須恵器	甕	D-1	覆土			<6.6>	内:青釉波紋状あて具	灰	良	q/a/w	肩部	
32	瓦質陶器	甕	D-1	覆土			<5.8>	ナデ	灰	良	q/w	底部	
33	瓦質陶器	甕	D-1	攢乱			<4.0>	外:平行印き	オリーブ黒	良	q/a/w	肩部	
34	瓦質陶器	鉢	D-1	覆土			<3.8>	外・内:施釉	黒褐	良	q/w	肩部	
35	陶器	甕	D-1	覆土			<4.6>	外・内:施釉	赤褐	良	q/w	肩部	
36	陶器	甕	D-1	覆土			<3.0>	外:施釉 内:青釉波紋状あて具	オリーブ灰	良	w	肩部	
37	陶器	行手?	D-1	覆土			<3.8>	外:飛び跑施す 内・外:施釉	暗オリーブ褐	良	w	肩部	
38	陶器	鉢?	D-1	覆土	<15.7>		<2.8>	外・内:施釉	オリーブ灰	良	w	口縁	
39	陶器	瓶?	D-1	覆土			<9.5>	<3.8> クロコ成形	灰白	良	—	肩~底部	
40	陶器	瓶?	D-1	攢乱			<6.2>	外:施釉 / ロクロ成形	灰白	良	—	肩部	
41	瓦質陶器	十能?	D-1	覆土	<8.0>	<6.1>	<2.4>	外:刻印	に赤い黄褐	良	q/a/r/w	—	保付着
42	カワラケ	皿	遺構外 包含層	遺構外 包含層	<8.8>	<4.8>	2.3	右回転ロクロ成形。回 転系切	に赤い褐	良	q/a/w	口縁~底部	
43	瓦質陶器	焰塔	遺構外 包含層	遺構外 包含層	<33.8>	<30.5>	<4.9>	外・内:ナデ	灰	良	q/a	口縁部	
44	瓦質陶器	鉢	遺構外 包含層	遺構外 包含層			<14.1>	外・内:ヘラナデ	灰白	良	q/w	口縁~肩部	

VI まとめ

今回の調査は、再築前橋城二の丸の外堀跡が想定される区域での発掘調査であり、成果として、想定どおりに前橋城二の丸の外堀（W-1）が確認できたことが第一にあげられる。そして、遺構（D-1、W-3）から埴輪片が検出されたこと、堀（W-2）、溝（W-3）が確認されたことが成果であり、問題点でもある。

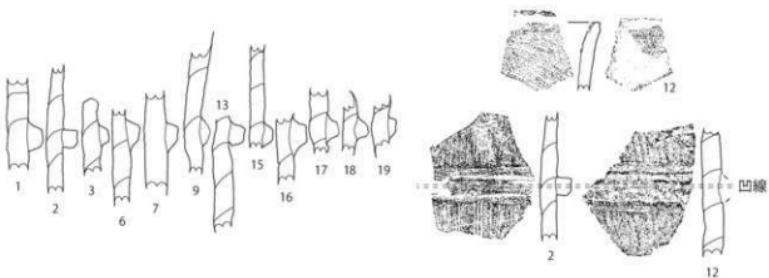
1. 墓輪片について

本調査区のD-1、W-3から円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪の破片が出土した。朝顔形埴輪片・形象埴輪片はそれぞれ、2点と1点で数量的に少なく、特徴を検討することは難しいが、円筒埴輪片は66点出土しており、検討可能である（第13図）。円筒埴輪は、完形の状態まで復元できるものではなく、器高・底径・口径は不明である。ただし、胸径は30cm前後と推測される。口縁には刻みをつけた個体がある。突端は幅広で突出があるものが多い。突端剥離部に凹線があり、また上辺にはし字状の圧痕が観察され、これは、突端の貼り付け位置を設定した痕跡と考えられる。埴輪外面の調整は継ハケが基本であり、ハケの痕跡が明確でないものは板ナデの可能性がある。そして赤彩が施される個体がある。胎土は円筒埴輪片・朝顔形埴輪・形象埴輪片とも似ている。石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子を含有し、2点ではあるが、結晶片岩を含むものも確認できた。円筒埴輪の時期は、特徴から川西編年IV期、5世紀後半と想定される。胎土や埴輪の作りから、同一個体になるものは少なく、20個体以上の円筒埴輪が存在する。この個体数の多さから古墳の存在が想定されるが、本調査区では古墳に関連した遺構が検出されなかつたため、古墳がどこに建造されたのかが問題点である。ただ、本調査区から約100m南という近距離で調査された前橋城（南曲輪地点）では埴輪片が出土していないことから、本調査区の近隣に古墳が存在し、D-1、W-3に埴輪が流れ込んできたと推察される。前橋城周辺の発掘調査やその周辺においても古墳が確認されており、中でも前橋城北曲輪遺跡では円筒埴輪・土師器壺から5世紀末～6世紀前半と推定される古墳の周堀が検出されるが、埴輪部は後世の削平により失われた可能性があるという。本調査区で検出された埴輪が配置された古墳も同様に削平されている可能性が高い。

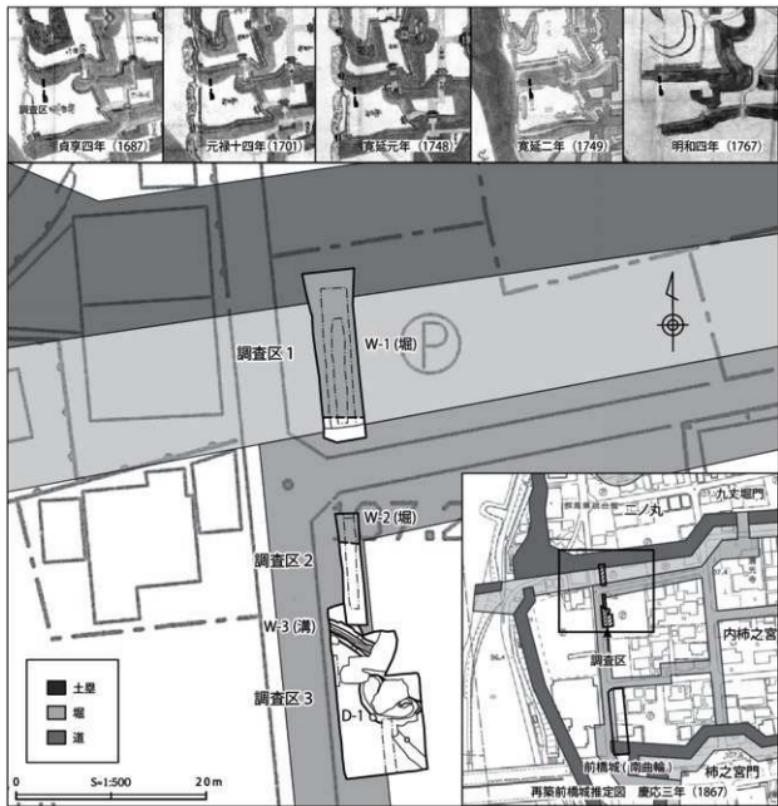
2. 堀と溝について

本調査区のW-1は前述のとおり、前橋城二の丸の外堀跡である。慶応三年（1863年）の再築前橋城絵図と照合しても一致する（第14図）。調査の期間と安全面から底面まで掘下げることはできなかったが、前橋城遺跡I・IIでの堀（2次調査1・2号堀、6次調査2号堀）の調査結果や利根川河川敷との比高差から深さは8m以上はあると推測できる。W-2は、W-1の南側の立ち上がりから南へ約10m離れた地点で確認された。W-2の北側の立ち上がりは調査区外であり、W-1との関係を確認することはできなかった。土層からは人為的に埋め戻された状況がみられず、自然堆積によって埋没したと判断している。覆土からは遺物が全く検出されず、時期不明である。貞享四年（1687年）以降の前橋城の絵図にも、W-2に対応するような堀は描かれておらず、再築前橋城絵図と照合すると道と推定される部分にあたる（第14図）。本調査では、W-2がどのような目的で作られたか不明であり、作られた時期は貞享四年以前と推測するのみである。W-3は断面形状が薬研形となる溝である。覆土は、ロームブロック混じりで、水成堆積による土層ではない。人為的に埋められた可能性が高い。前橋城絵図から貞享四年までは埋没したと思われる。遺物は埴輪片・陶器が出土しており、遺物から時期を決定することはできない。ただ、前橋城遺跡IIから同様の断面形の溝が検出されており（第4次4溝など）、時期は古代から中世となっている。周辺遺跡の状況を考慮して古代から中世ではないかと推測する。

最後に、今回の調査で再築前橋城二の丸の外堀が確認されたことは成果である。円筒埴輪片から推測される5世紀後半の古墳の存在、前橋城絵図に描かれていない堀など、今回の調査では解明できなかった問題もあるが、そのような事実が確認されたことも大きな成果である。今後の発掘調査の蓄積によって、前橋城のさらなる確認と本調査で確認された問題が解明されることを期待したい。



第13図 円筒埴輪



第14図 前橋城絵図と本調査区検出遺構の対応関係

参考文献

- 阿久澤真一・神宮殿・清水亮介 2008 「元紀社沿海遺跡群（13）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 荒井秀樹 1996 「前橋城三ノ丸遺跡」前橋地方・家庭裁判所布道跡調査会
 井川達也・片野進介 1997 「前橋城跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 石守 兼 2007 「前橋城三の丸遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 梅澤克典・笠原仁史 2008 「前橋城 事務門丸馬出櫓跡の調査」前橋市教育委員会
 神宮殿・高階聰美 2009 「前橋城（南曲輪地点）」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 高橋亨・小畠尚 2004 「前橋城」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 松原孝之 2002 「前橋城北曲輪跡」群馬県埋蔵文化財調査報告書
 藤巻泰男・片野進二・巾 隆之・板野正信 1999 「前橋城城跡II」群馬県教育委員会
 山下誠司・大高和泰明・笠原仁史 2008 「南町市之丸遺跡」前橋市教育委員会
 山下誠司・大高和泰明・笠原仁史 2008 「天神里遺跡」前橋市教育委員会
 前橋市 1971 「前橋市史」第1巻 前橋市史編纂委員会
 前橋市 1973 「前橋市史」第2巻 前橋市史編纂委員会
 前橋市 1975 「前橋市史」第3巻 前橋市史編纂委員会
 群馬県 1991 「群馬県史」通史編2 原始・古代2 群馬県史編さん委員会
 群馬県 1990 「群馬県史」通史編4 近世1 群馬県史編さん委員会
 前橋市教育委員会 1996 「関東の城・前橋城」前橋市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	まえぼじょうみなみくるわちてんなんばーに							
書名	前橋城（南曲輪地点No.2）							
調書名	都市計画道路前橋公園通線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	神宮殿・山崎芳春							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集機関	前橋市教育委員会							
所在地	〒371-0018 前橋市三俣町二丁目10-2 TEL 027-231-9531							
発行年月日	西暦2010（平成22年）年12月20日							
所取遺跡	所在地	コード	世界測地系	日本測地系	調査期間	調査面積	調査原因	
前橋城 (南曲輪地点No.2)	前橋市 大手町 一丁目 123-5他	市町村 10201 遺跡番号 22H49	北緯 36° 23' 19'	東經 139° 03' 34"	北緯 36° 23' 08"	東經 139° 03' 45"	20100706 ～ 20100806	約235m ² 道路改良工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	要約			
前橋城 (南曲輪地点No.2)	城	近世・ 近代以降	堀	1条	陶器、陶磁器	再築前橋城時代の二の丸外堀を確認した。東西方向に延び、南側の立ち上がりまでを調査した。北側は調査区外に延びる。		
						遺物なし		
	時期不明	溝	1条	円筒埴輪・形象埴輪・陶器	堀、溝は再築前橋城の絵図に記載されていないため、時期が不明である。土坑は古墳時代から近世までの遺物が検出され、時期が不明である。土坑と溝から5世紀後半と推測される円筒埴輪片が検出されている。			
								土坑

写 真 図 版





PL.1



調査区1 全景 北から



調査区1 W-1 SPA 南東から



PL.2



調査区2 全景 南から



調査区2 W-2 SPB 南から



PL.3



調査区3北側 全景 南東から



調査区3北側 W-3 完成状況 全景 南東から



PL.4



調査区 3 北側 W-3 SPA 南東から



調査区 3 北側 W-3 SPB 東から



調査区 3 北側 W-3 遺物出土状況 近接 南東から



調査区 3 北側 W-3 完掘状況 全景 南東から



調査区 3 南側 全景 南から



PL.5



調査区3南側 全景 東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 全景 南東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 全景 北から



調査区3南側 D-1 積・遺物出土状況 西から



調査区3南側 D-1 完掘状況 全景 南東から



PL.6



調査区3南側 D-1 SPA 南から



調査区3南側 D-1 拡張状況 西から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 南東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接1 南東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接2 南東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接3 南東から



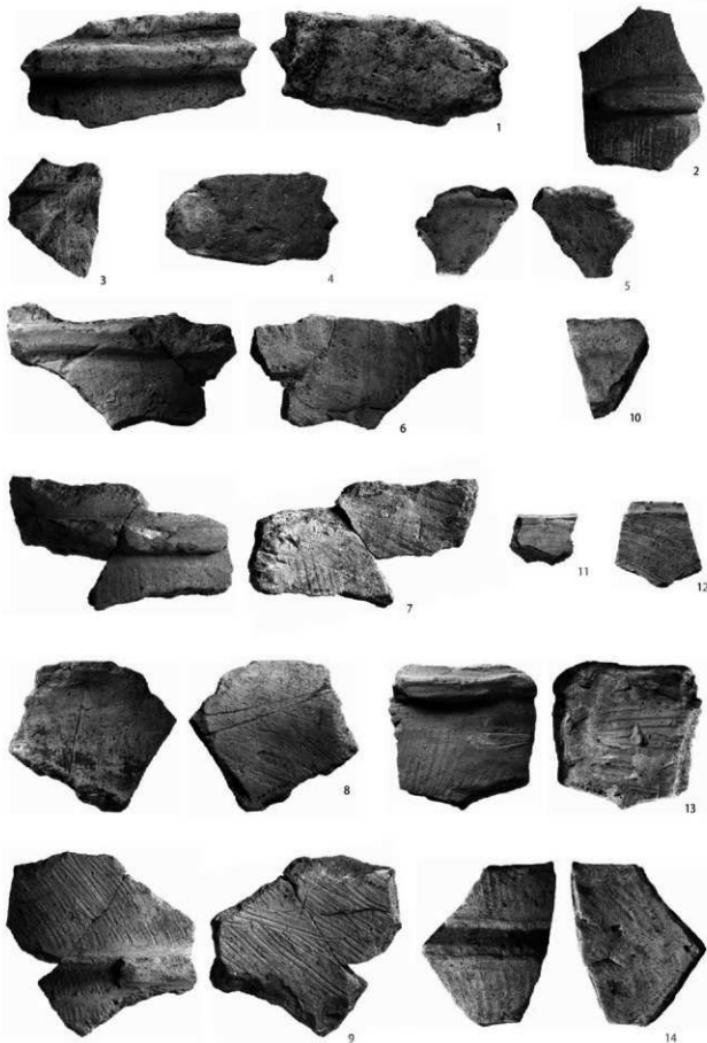
調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接4 南東から



調査区3南側 D-1 遺物出土状況 近接5 南東から



PL.7



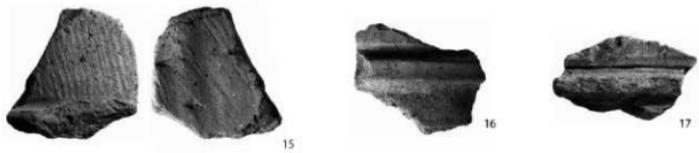
出土遺物（1）

0 S=1:3 5cm





PL.8



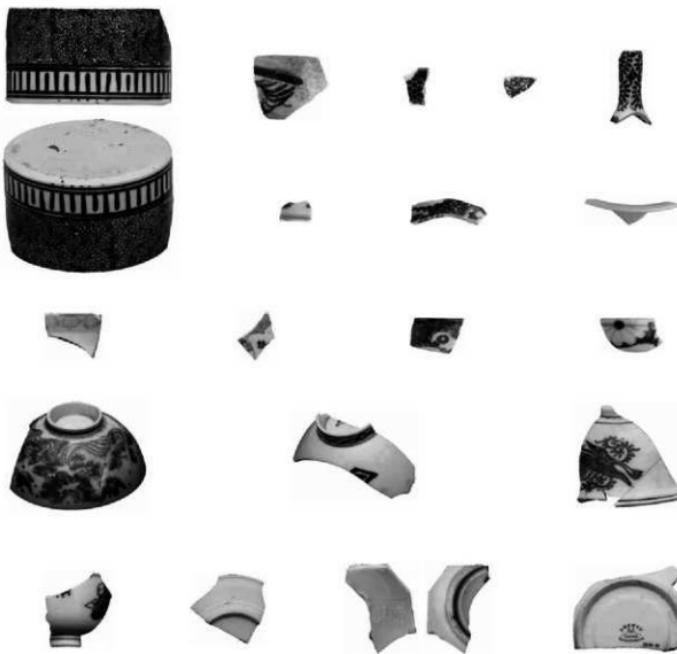
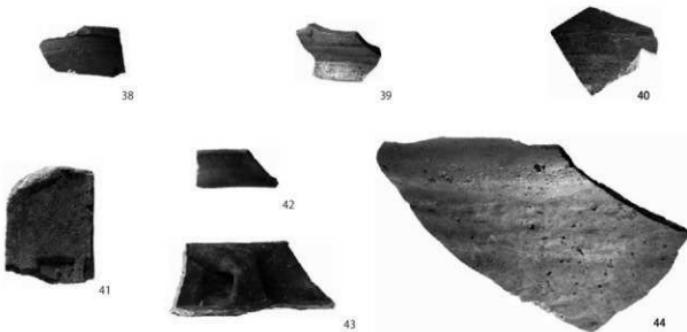
出土遺物 (2)

0 5-1:3 5cm





PL.9



前橋城（南曲輪 No.2）出土陶磁器
出土遺物（3）

0 5-1:3 5cm





前橋城（南曲輪地点 No.2）

印 刷 平成 22 年 12 月 15 日
発 行 平成 22 年 12 月 20 日

発 行 前橋市教育委員会
群馬県前橋市三保町 2-10-2
電話 027-231-9531

印 刷 朝日印刷工業株式会社

